

NHK 大河ドラマ「大友宗麟」誘致推進協議会 令和4年度「大友氏顕彰フォーラム in 大分」報告書

新型コロナ感染状況が全国的に低くなり、社会全体が「ウィズコロナ」の方針で経済活動を行っている中、当推進協議会も感染防止対策を十分とりながら活動しておりますが、11月に入って感染数が上昇、第八波に入ったのではないかと危惧されています。そんな中、去る10月29日(土)30日(日)は「第9回宗麟公まつり(協賛)」、その前日には赤神諒氏の大分合同新聞連載の「闇千代」に関する講演があり、11月5日には「大友氏顕彰フォーラム in 大分(主催)」を計画通り開催、以下にそのご報告をいたします。

会場は大分市コンパルホール3階多目的ホール。今年は大友能直公生誕850年・800回忌、頼泰公生誕800年の節目に当たり、折よくNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」が好評放送中である。まず「鎌倉殿三代と大友氏三代」、「天正遣欧使節」、「大河ドラマに向けて」と、かなりタイトな内容だったが時間的制約の中でほぼ予定時間(13:00～16:40)で進められた。

今回は椅子並べの会場づくりや看板取り付けが通常時より追加作業となり、また音響操作など、全てを我々でしなければならず、舞台裏のスタッフは限られた人数でかなり苦勞を強いられた。なお、当日来場者に配布した資料を同封したので参照していただきたい。



◎入場者数は、表彰者参加19名を含め約150人と期待より少なめだった。※各地でのイベントが年間で最も多い日だったためと考えられる。

■エッセー応募作品表彰式

6月末に応募を始め9月上旬に締め切り36作品の応募があった。いずれの作品も熱い思いが感じられ甲乙つけがたいもので、多くの応募者に賞金・品が広く渡るように変更したため特選の賞金5万円が3万円に、また佳作以上の副賞に歴史雑誌『忘却の日本史』を追加した。応募者全員にフォーラムの参加を呼びかけ19名の参加をみた。本題の前に表彰式を行った。

牧達夫審査委員長が進行を仕切り、準佳作・佳作・入選・特選と順次表彰していき、賞状と副賞を手渡した。特選のみの作品をコピー印刷し参加者全員に配布した。なお、全作品は来年秋発行の『大友氏の風景(11)』に掲載する。また、この報告書には特選者と入選者のみを次に掲載する。

特選／工藤和子 **入選**／三宅英明、船橋智久、鳥谷靖子、桑原英治、加来安代、佐藤圭、安達郁雄(順不同・敬称略)



■パネルディスカッション「鎌倉殿三代と大友氏三代」

今年春、佐藤雅秀氏が『大友能直は頼朝の実子なり』という本を出版、この内容に触発された牧会長と若杉事務局長が出演を依頼、快諾を得て現在放送中のNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」もあって今回のタイトルとなった。コーディネーターに牧達夫会長、佐藤弘俊広報委員長。パネリストに佐藤雅秀氏(作家・元大分合同新聞記者)、坪根伸也大分市教育委員会文化財課課長、若杉の3人で進めた。

佐藤氏は、若杉の鎌倉幕府草創期の源平合戦にふれたのを受け、頼朝の親友・中原親能とその養子・大友能直の出自に触れた。頼朝の能直に対する破格な待遇に他人では考えられないとの意見は、佐藤・牧・若杉各氏に共通するものだった。佐藤氏と若杉は鎌倉幕府の正史『吾妻鏡』の記述を引用し、佐藤氏はその他の書物「梅松論」や「増鏡」「玉葉」「愚管抄」「明月記」などの記述も参考に話した。大河ドラマの主人公北条義時の無官



時代、9歳下の大友能直は16歳で左近将監という官職についていることは「実子ならで」で、通常は考えられない。さらに中原親能は源頼朝の代官として、また京都守護職として活躍。大友能直は若干23、4歳で和田義盛・梶原景時不在時の侍所別当の代役も務め、さらに30代以降は京都六波羅に居を定め検非違使(京都、御所の警備)にも就いた。

また、坪根氏は大友氏3代頼泰は、北条泰時の偏諱を賜い、地方の府中(大分市)で「新御成敗状」を発布したのは全国的にほとんど例がなくその先進性に触れた。これは北条泰時が発布した「御成敗式目」に倣ったもので、3代執権泰時との親密ぶりを表すものであると持論を展開した。

牧会長は、親能と能直は公的には有力御家人のような派手さはないが陰(私的に)で頼朝政権を支えたことは間違いないとした。話は現在になるが、今年11月27日、豊後大野市で大友能直800回忌を地元主催で執り行うので全面的に協力したい旨を披露した。実は200年前(文政5年・1822)の600回忌には柳川藩立花家の全面支援で盛大に行われたことが常忠寺に残る石碑に刻まれている。

今回会場での配布資料はスライド画面を印刷したものだが、詳細すぎて3割程度しか説明できなかった。後日の資料としてほしいとは、作成者の若杉の願いである。

■講話「天正遣欧使節」

作家の櫻田啓氏が今最も関心を寄せている事柄で数年前に『ローマ熱狂』と題した小説を出版している。正使である宗麟の縁戚の伊東マンショほか4人の使節団の模様を櫻田氏の視点で熱く語った。当時のヨーロッパでもっとも知られた日本の王が大友宗麟であり、織田信長より知られていたという。その宗麟の名代として少年使節団が遠くローマまで来てローマ教皇に拝謁し、ローマ全市民が総出で熱狂した模様を来場者に伝えた。



■座談会「大河ドラマに向けて」

今回は柳川市から植野かおり氏(立花史料館館長)、新宮町から榊山悟氏(作家・歴史コメンテーター)、津久見市から木村武司氏(津久見史談会会長)、若杉の4人がパネリスト。牧会長と佐藤広報委員長がコーディネートした。

植野氏は闇千代と立花宗茂を主人公に復活をテーマにし、榊山氏はその二人の実父・義父としての立花道雪を、また大友家の博多支配の中心人物として描く。木村氏は知られざる大友家の重要人物(田村氏・渡辺宗覚)に光を当てたいと、各自の思いを語った。また、民間団体としての動きや行政の連携など、現在進行形と将来の抱負などを語り、今日出席した三者に加え、大友氏に関係する地の九州全域から全国にこの輪を広げるのが使命であるとの共



通認識を持つことが大切だとの結論に達した。

令和4年11月15日
会長 牧 達夫
記録者 若杉 孝宏

その他関連事業の報告

■宗麟公まつり前夜祭「赤神諒を囲む懇親会」

10月28日(金)夜。9月23日大分合同新聞の連続小説「闇-GIN-」が始まった。挿絵に緑丘高校美術科生に依頼する等全国的に話題を呼んでいる。講演後、牧会長、坪根文化財課課長、若杉とプライベートに懇談し、赤神諒氏の想いを聞いた。史料の少ない闇千代だからこそ自分の想像力が生かせると言っていたが、史実と脚色が全く区別がつかず、ほとんど事実ではないかと思わせるのが「大友サーガ作家“赤神諒”」たる所以だ。まさにこれこそが歴史小説のだいご味である。



■宗麟公まつり（福岡との交流）

10月29日(土)・30日(日)開催。大河ドラマ推進協と顕彰会会員並びに大学生有志による寸劇「富士の巻狩り」を演じた。また、大友氏顕彰会と推進協のブースで出版物を販売した。思ったほどには売れなかった。また、柳川市や新宮町の大友氏関係の団体が多数参加し、交流が定着しつつあることを感じた。入場者数は2日間延べ約2千人。



●九州・山口地域の歴史雑誌『忘却の日本史 27』

令和4年3月に開催した「フォーラム in 日田」の出版社の潜入レポート(記事は若杉)を掲載した(10月上旬発売、有名書店で販売)。当推進協として70冊を購入し、価格の2割を当会の活動費に充てるつもりだったが、うち27冊は取材協力した関係者とエッセー応募者の副賞としたので無収入。12月初旬現在3冊の在庫である。会員各位の協力で売り切りたい。

※手出し額は当会のPR費という考え方をしたい。

■道雪公まつり参加

11月6日(日)。昨年からは福岡県新宮町の道雪会との交流を始めた。今年は牧会長が県外との交流を優先させたため、事務局の若杉・藤田・大塚の3名で参加してきた。道雪会と大友宗麟鉄砲隊とは以前から交流があり、「宗麟公まつり」には道雪会から20人近くが参加。「道雪公まつり」には鉄砲隊から数人が参加し、我々と共に交流を深めた。舞編集長が経営する店に『大友氏の風景(十)』5冊をPRの一環として提供した。



■大野川合戦祭りで見えた夢

今年が多忙につき「大野川合戦まつり」に不参加を決めていたが前日急遽主催者側から牧会長に参加要請が来て成大寺での供養祭に参加した。利光宗家のご子孫や鹿児島や四国からの参加者と数年ぶりの再会を喜び合った。来年の大友氏顕彰会の「研修バスツアー」は鹿児島を予定の旨本田会長に伝えた。その際、宮崎県木城町で「高城川合戦祭り」と「大野川合戦祭り」を隔年で開催する夢が沸いた。



今や西日本有数の合戦祭りに成長し、鹿児島・福岡・高知・香川県などから長宗我部、十河氏のご子孫などが多数が訪れている。今年では地元も地元、実家が会場と目と鼻の先にある勝光寺が実家の南こうせつさんがライブコンサートを実施、あいにく仕事で聴けなかったが大勢の観客が押し寄せた。

■NHK への要望

去る9月8日、牧会長は広瀬知事とともに4年ぶりにNHKを訪問して大河ドラマ化を陳情してきた。前田会長は中津市出身ということもあり、非常なご理解を頂いたとようである。ついでに在京県人会、神奈川県人会の会合に来賓として出席し、現在の活動状況を報告した。また大友氏大河ドラマ化に向けては、広域的な連携は絶対大きな力になると訴えたが、もっと強力な支援を頂くには地元大分から複数の会員が出向き交流を深めることが大切であるとの印象を強くした。

今までは当会と行政(大分県知事・市長・議会議員)での陳情だったが、今後は学者、作家、首都圏や各地の県(市)人会など幅広い連携で熱意を伝えたい。NHKは地元の広範(全県民)な熱意を最重要視しているため。※大友氏に関する歴史的価値は十分に伝えてきた。あとは地元の熱意と支持、加えて全国的な知名度の周知の方策である。

■小田原・鎌倉研修旅行・11月20・21・22日

大友氏のふるさと小田原市と鎌倉市の大友氏誕生の地を訪ねた。参加15人。今年は前述したようにタイミングとして申し分ない年である。この旅行記は、来年秋発行の『大友氏の風景(11)』に掲載する。



大友能直公創建の長善寺



秀吉の一夜城(石垣山城)跡から小田原市内を望む



修築が済んだ小田原城



鶴岡八幡宮



頼朝息女乙姫の岩船地藏堂



建長寺



大友能直が建築奉行した持仏堂跡

■大友能直公八百回忌・11月27日(日)

豊後大野市藤北にある常忠寺には能直公の供養塔がある。近くに能直の菩提寺と伝わる勝光寺(いずれも廃寺)があり、200年前に柳川藩の尽力により盛大に六百回忌が挙行されている。七百回忌はなく今回は200年ぶりの供養祭である。提唱者は地元の岡村氏。行政の援助も受けられず地元民も関心を示さず、大友氏顕彰会に相談があった。当会としても来年1年遅れで計画していたが2022年の今年がその年に当たるので全面協力することにした。予算的には厳しいが、人的協力は惜しまないということで推進協としても多くの参加を呼び掛けたが8名に終わった。

来賓で参列した足立義弘市議会議員は、ご自身発案の来春に予定する「大友頼泰公生誕八百年記念祭」の計画を発表した。当推進協議会としても全面協力しなければならない。



2022年(令和4年)12月5日 月曜日

初代大友氏しのぶ

800回忌に「ゆかりの地」巡りや法要

神奈川と豊後大野で

【神奈川・豊後大野】鎌倉期から戦国末期まで約400年にわたって豊後を治めた大友氏の初代能直(1172-1233年)の800回忌に合わせ、11月に神奈川県と豊後大野市でゆかりの地を巡るツアーや法要があった。

屋敷跡などを散策
 ○ツアーはNPO法人大友氏顕彰会、後援理事の長尾善子(2022年創設)も主催。20、22日あり、会員ら15人が能直まつり、会員の神奈川県内の史跡を訪ねた。

豊後大野発祥の地である小田原市大友では、一帯のゆかりの地を巡る大友氏顕彰会、後援理事の長尾善子(2022年創設)も主催。能直の子孫の高橋が、豊後大野の小田原攻めの際に布陣したとされる石垣山に足を運んだ。参加者は「ここからは東大友なと見え、吉統は父祖の地を眺めながらどんな感慨を抱いただろう」と思いをはせた。

鎌倉市では、三浦重親一が後世に伝わるゆかりの地を重用した源頼朝の墓や、現任は家系となつていない大友屋敷跡などを散策した。牧道理事長は「小説などで言われている大友氏の初代は、謎も多い。ツアーを通じて、さまざまなできごとや、右義経といった、大友氏とのつながりを感じた」と話した。

京都で生まれた後、菩提寺の勝光寺(大野町藤北)と墓所の常忠寺が建てられ、常忠寺に墓とされる五輪塔がある。1802年、大友氏と関係が深い福岡県の柳川藩主の名代らが参加して600回忌を開いたとする文献も残っている。

法要には市内外から約50人が参列。読経や焼香、供養した後、岡村会長(65)が大友氏と豊後大野の関係を語り、「豊後守護になつた能直は、大野九郎を輩出したため現在の別府市に上陸。1106年の神角寺の合戦で大野氏を破つた」と話した。

市内外の50人参加
 ○800回忌法要は27日に豊後大野市大野町藤北の常忠寺であった。地元住民らでつくる実行委員会(岡村哲也会長)の主催。実行委によると、能直が

源頼朝の墓を訪れた大友氏顯彰会の会合で「神奈川県鎌倉市」

大友氏の初代能直の800回忌法要で参列者ら大友能直のゆかりの地を巡る

(山田 勇)